

# 水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

オンライン雑誌WENETをはじめた

室謙二 松岡裕典 市川昌浩 粉川哲夫 津野海太郎 2

マイ・ホビー その(3) 高橋茅香子 12

任意の一日 山川枯草木 16

ぬきがきうた(その三) 木島始 19

実現されなかったシベリア旅行 高頭祥八 22

異土の傍居にならない人たち 田川律 26

走る・その⑩ デイヴィッド・グッドマン 30

# オンライン雑誌 WENNETをはじめた

## 室謙二

## 松岡裕典

## 市川昌浩

## 粉川哲夫

## 津野海太郎

津野——室さんたちがWENNETというパソコン・ネットワークをつくって、こんど、そこに粉川さんがくわった。そのうちおれもまかせてもらおうと思ってるんだけど……。

室——もうずいぶんまえに、津野さんとやろうと話してたんだよね。

津野——四、五年まえ、水牛通信で粉川さんと自由ラジオの話をした。あの直後だよ。でも、あのころは、まったく非現実的な話だったよな。いま企業としてのネットワークはいくつぐらいあるの？

松岡——企業としては、ひとつも成立していない。

津野——じゃあ、企業として成立することをめざしているのは？

市川——十ぐらいですね。いちばん大きいといわれているのがNECのPC-VANですけども、それでも三万人程度。

津野——もっと小さなやつは……？

市川——たぶん三〇〇ぐらいあるんじゃないですか？ ただ、パソコン・レベルのネットは、二、三か月でつぶれちゃうのが多い。

松岡——あと第三セクター的な地域ネットワークがある。大分のコアラとか仙台のコミネットとかね。

粉川——住民運動とむすびついた電子村っていうのもありますね。

津野——で、松岡さんは、いつコンピュータにかかわりだしたんですか？

松岡——まえから興味はあったんだけど、自分で買って使うまでにはいかなかったんです。雑誌なんかを読むと、ファイルに互換性がないとか、プログラムが変わっちゃうとデータが使えなくなるとか、いろいろ書いてあるでしょ。これはダメだなと思ってたら、そのうち、プログラムがMS-DOSで走るようになってきた。これならそ

ろそろ大丈夫かなと思って、やっと買ったのが一昨年の十一月。そして去年の三月、市川さんがバッジ・ファイルというのをつくったわけ。

津野——バッジ・ファイル？

松岡——あのね、ふつうは、いまいたMS-DOSっていう、コンピュータの入出力を制御する、いちばん基本的なプログラムがあって、その上にワープロなんかのアプリケーション・ソフトをのっけて、コンピュータを使ってるんですね。

とところが、MS-DOSの中にいろんなコマンドがあって、それを組み合わせてみると、ある程度、自分に必要なプログラムをつくることができる。

室——それがバッジ・ファイル。うーん、これは説明がむずかしいな。

市川——コンピュータには、もともと外部との通信のための端子がついてるんですよ。その端子を使ってコンピュ

ータ同士をつなげると、こっちのコンピュータから遠くのコンピュータをコントロールできる。

室——という簡単なプログラムを、あるとき市川がつくったわけ。それをぼくが見て、こういう簡単なやり方で通信のホスト・プログラムができるはずだと勝手に思いこんだ。

津野——ホストというのは、要するに通信ネットワークの拠点だね。放送局みたいなものか？

室——うん、センター。で、かならず簡単なやり方があるはずだと信じて、毎朝三時間、二週間ぐらいかかってプログラムをつくったの。一種の冗談プログラム。

市川——まだ電話線にもつないでなかった。こういうふうによれば動くはずだぞというシミュレーションね。

室——そう。ぼくはシロウトでしょ。シロウトとして、アスキー・ネットと

いう大ネットをモデルに、それを簡単なプログラミング言語でコピーしてみたわけ。かならずできるということを確認したくてさ。それに、まア、おれの人生にもいろんな問題があるからさ、毎朝三時間、必死になつて……

津野——そっちに逃避したと。

室——うん、逃避したの。それで、やっとできあがって、それを市川プロに見せたら笑うんだよ。

市川——たいへん面白かったね。

室——おかしかった。でも、それではとんどのことができるわけさ。あれがはじまりだったね。おなじ部屋の中で、「おい、こんどはおまえが打てよ」なんてやってた。

津野——「水牛通信」のワープロ座談会みたいなものだ。

松岡——そしたら去年の夏、室さんが突然、電話線につなぐモデムをアメリカから二台買ってきた。日本で九万か

十万してたのを、三万五〇〇〇ぐらいで買ったのかな。

そいつで渋谷にあった室さんの事務所と下北沢のここをつないで、とにかく通信の実験をやってみようということになった。室さんが向こうの——ホストの入出力を外から電話線でコントロールできるようにしておいて、それをつけっぱなしにしたまま、渋谷から急いで走ってくるわけ。

粉川——自由ラジオとおんなじだ。

室——実験というより、やっぱりシミュレーションだね。世の中が何千万、一億もかけてやってることを、どうやってたらばくらが簡単な方法でコピーできるかという……。

津野——なるほど。それで？

松岡——それで去年の十一月、室さんが「シンプルなほうがつかいやすいし、まちがいが起きない」といって、さっきの冗談プログラムを、うんとシンプル

ルなものにしたんだよね。

室——それは市川がやったの。

松岡——たった三行のプログラム。そうしておいて、室さんがまたアメリカに行っちゃったあと、それを市川さんとぼくとで改造していった。

室——おれがアメリカから国際電話でアクセスするたびに、やり方がちがってるんだ。

津野——わかりやすくいうと、どんなふうに変えてったの？

松岡——たとえばね、いくつかの部屋をつくった。

津野——部屋？

松岡——コンピュータというものを、そこにばくらが入っていついてるんなことをする電子的な空間だというふう

に考えたわけ。  
室——コンピュータを空間イメージで考えなくちゃいけない、と市川がいい

コンピュータのスタイルというのは階層ファイル——だんだんこまかくなっていく逆ツリー構造になって、そういうふう

にネットワークもつくられてる。ところがアメリカで、あたらしく電子会議という概念がでてきた。会議はファイルではなく会議室という概念

でやらなくてはいけないと。それやこれやで、市川の主張をきいた瞬間、あとの二人も、そうだ、これからは空間メタファでコンピュータを考えなくちゃいけないと思

った。松岡は一時、メニューを地図でつくった

りしたんだよね。松岡——メニューがビルの図面になっているの。まず入口にはいる。そこにメール・ボックスがあつて、自分あての手紙を眺める。そのさきとか、みんなが書いた原稿をあつめておく資料室とかがある……。コンピュータの原理

のを、もっとふつうの人間の生活に近づけようと考えた。

津野——頭の中のイメージを、ふつうに暮らししているときと切り換えなくて

もいよいよにしたわけだ。

室——そうそう。ドアをあけて、なかに入つて、そうすると部屋の図面があつて、それを指でさす

と行きたい部屋に行ける。で、その部屋に行くと、壁

にいろんな文章が貼つてある。

粉川——最初にぼくがアクセスしたときは、ロビー

までは入れた。おもしろいのね。ふつうコンピュータというの

はインデックスばかりで抽象的なんだけど、WENETには身体性がある

ある意味で、そういうのはすでにゲームではあつたよね。

室——アドベンチャー・ゲームの感覚

なんだな。空間を移動していつて、ものを発見していく。

粉川——アップルのコンピュータがそ

うでしょ？ 抽象的なものが身体をもつとか、ものが立体性をもつとか、そういう意味だよ。

室——コンピュータを使うには、どう

も右とか左とか、そういうような感覚のほうがいいんじゃないかな。

テレビでバックミンスター・フラー

と宇宙飛行士が対談したんだって。そ

のとき宇宙飛行士が「上になんが見え

た、下になんが見えた」といったら、

フラーが「それはえらく地球的だな」と

いった。宇宙空間に上と下はない。

だって重力という概念がないかぎり、

上も下もないんだからさ。で、フラー

いわく、「宇宙にあるのは右と左だけ

だ」って。フラーって、あまり好きじゃ

なかつたけど、その話をきいて、え

れえやつだと思つた。

つまり右と左というのは、人間にとって最後までのこる空間認識なんだよ。だから、われわれのネットもそういう

ふうじに——モニター上で「右に行く」とか「左に行く」とかやったら、抽象的なコマンドなしでもいけるんじゃないかと……。

津野——そこまできて、やっとWENET第一期のスタートか。

室——なんでWENETかというかね、おれがアメリカでSoft East Interfaceという会社をやってて、それにSoft East Catalogueをひっかけて……。

松岡——地球球通信。それに「われわれのネットワーク」という意味もひっかけて……。

津野——ふんふん。

松岡——そうこうしているうちに、ぼつぼつ市販のホスト・プログラムがではじめた。

市川——その一つが、いまここで使っている「ネットメーカー」という技術評論社からでたソフト——いままでのものとぜんぜんちがっていて、それ自体

で電話を三回線サポートできるの。ふつうの安いやつは一回線しかサポートできない。で、これはいいんじゃないかと思っただけど、構造がすごくシンプルなのね。はっきりいって機能不足のところがある。

室——それでいいぶんもめたんだけど、結局、これで行こうということになったのが今年の三月。

津野——それからが第二期だね。第二期の方針はなんだったの？

松岡——電子出版。仲間だけでメールをやりとりするだけじゃなくて……。

コンピュータ通信による出版だったから、最初は何部ぐらいでるだろうから何部刷らなくちゃいけないとか、それをストックしておくための倉庫があるとか、そういうことを考える必要は一切ない。コンピュータのなかにデータとして入れておいて、それを必要な人が必要なときにプリントアウトして、

そのぶんだけお金を払えばいい。そうすれば、ものすごく少数数の出版も可能になる。

室——そのさい、いちいちプリントアウトしなくても、どうやったらモニターで読める文章が書けるかという問題があったな。改行とか行間のあけ方で、読みやすさがまったくちがってくる。モニターのための文体論というのは、まだアメリカにもないね。

松岡——もう一つ、そのとき問題になったのは、ネットそのものが編集装置にならないかということね。ふつうのパソコンなら検索機能があるでしょう。たとえば「ネットワーク」という文字列をふくむ原稿をぜんぶひっぱりだすことができる。そういう機能をもったホスト・プログラムがあれば、それで編集ができるんだけど、実際には、そういうものはないわけ。

つまりね、BBS（電子掲示板）に

書いたものは、だれも原稿だと思っていない。ちょこちょこっとモニターに書きこんで、読んで、それで終わっちゃうんですよ。それらを一つの流れのなかで構成して、あたらしい意味をもったものとして読ませるといふ発想がどこにもない。

室——たとえば、いま日本で最大にかいネットであるアスキー・ネットなんかだと、みんなからの意見をあつめて、それをベタベタ貼りつけておけばいいという考え方のね。それに比べると、ぼくらののは、もうちょっと編集志向型なんだ。

松岡——バートとあつめておいて、なにか見えるでしょう？ といわれてもね、見える人には見えるけど、見えな人には、たんなるひとりのごとの集積としか見えない。それを本当にみんなに返すというのであれば、ある種の編集作業がある。

粉川——それもなかなかむずかしい問題だねえ。

室——そう。それで、そういう問題をいろいろ議論してた。あとオープンにするかクロズドにするかという問題もあつたしね。ぼくらは最初からオープンにしようとは思わなかった。その時点では、ほとんどのネットがオープンだったんだけど。

津野——なんでオープンにしないの？ 市川——いままでのネットをずっと見てくると、オープンにしている人たちのばあい、器を貸すから勝手にやってくれという考え方なんですよ。ぼくらはそうじゃなく、まず中身をつくりたいという考え方でやっていますからね。ある程度クロズドにしておいたほうがいい。

室——もう一つ、コピーライトの問題も考えた。パソコン通信を二年ぐらいやってわかったんだけど、あそこに書

いた途端に、みんな、コピーライトはなくなっただけだと思っちゃうんだ。原稿用紙とちがって、ワープロで書いてると、みんな平気でうしろからのぞくでしょう。それとおなじで、いちどBBSにのっちゃうと、そこからとってきて原稿にしちゃうというようなところが、平気でやれちゃうのね。

松岡——むかしアメリカのコンピュータであつただけど、BBSにストックされた原稿をひきだして、自分の本かなにかで使っちゃった。あとね、どっかのネットにおもしろい原稿のってると、それを他のネットに勝手にのせちゃう。つまりルールが、ぜんぜんないんですよ。

室——コピーライトというのは、おおよそ個人という概念があつて存在するんだけど、ネットワークになるとそれが消えちゃう。

松岡——自分で書いたという感覚がな

くなる。と同時に、他人が書いたという感覚もなくなる。だれのものでもない原稿という感じになっちゃうね。

人の書いたものが他人の書いたものじゃなくなるような気がしたり——そのことを逆にうまく使えば、そこに自分の頭の中身がどどん流れこんでいて、だれかの頭の中身も流れこんできて、つまり、複数の人間たちの頭脳の共有といったこともできなくはない。

津野——それは実際にやってみないとわからない感覚だろうな。で、そのことがなんで問題になるの？

ただ、それは、お互いに、この人ならばキチンとわかってくれるし、ほかのネットに流したりしないというクロージドな信頼関係があって、ようやくなりたつことなのね。

松岡——日経ネクストもそう。みんなに書かせて、その原稿は自分とこの雑誌に自由に転載できると書いてある。室——これはいいじゃないか、と、そのことを議論したわけ。

津野——それはわかるんだけど、電子出版も出版という以上、不特定の多数にむけて成り立ってるわけだし。本のばあい、かりに五〇〇部しかだせないとしても、原理としては何万もの読者に対してオープンになってる。それ以外にやりようがないんじゃない？

松岡——で、ここでは本当に読ませたい人以外には読ませない、と。

室——そうすると、そこでどうコピーライトを発生させるかという……。

自分の書いたものが自分の書いたものじゃなくなるような気がしたり、他

人への書いたものが他人の書いたものじゃなくなるような気がしたり——そのことを逆にうまく使えば、そこに自分の頭の中身がどどん流れこんでいて、だれかの頭の中身も流れこんできて、つまり、複数の人間たちの頭脳の共有といったこともできなくはない。

粉川——コピーライトというのは、もともとパブリックな領域にかんする問題だから、ちょっとちがうんじゃないかな。つまり、オープンにした部分で、はじめてコピーライトの問題がでてくるんじゃない？

粉川——ゼロックスの場合だと、いちど活字になったものをコピーするのど手書きの文章をコピーするのではちがうよね。あとのほうは、盗む、という感じになるわけよ。文章が活字になると、そのぶん一人だけのものじゃないうという部分が出てくるでしょう。それが電子文字になるとどうなるのかということだね。

室——あたらしいメディアだから、まだ、みんなの考えがちんと成立してないんだ。

松岡——うん。だからね、WENNETのばあい、最初からのメンバーしか入れない部屋があって……。

津野——つまり、きみたちのベッド・ルームだ。

松岡——そのほかに、だれでも入れる空間をつくることにしたの。クロージドのほうは、そのための市販ソフトはなにもないから、なんとか自分たちで

工夫してやっていこう。オープンのほうは、なるだけ簡単に使えて、いろんな人がアクセスできるようにしたほうがいいと私が独断的に決めて、さっきいった「ネット・メーカー」を使うことにしたわけ。

その場合、オープンな部分は雑誌とおなじだと考えたわけ。コピーライトは書いた人にある。ネットにはない。津野——それで、いくつぐらい部屋をつくったの？

室——十五だったかな。

市川——それが三つのレベルに分かれている。システムからのお知らせ、オープン・レター、BBSが第一のレベルで、これはだれでも入れる。その上にほかの人が書いた原稿を入れておく図書室や、お互いの原稿を批評しあったり、どこかでこんな文章を読んだけど面白かったとかいう部屋や、噂話とか悪口の部屋なんかがあって、ここには

ある程度オープン。  
松岡——というような微妙な空間があるんだよ。  
市川——その上に最高会議というか、身内だけで会議する完全にクロージドされた部屋があるのね。  
室——その四月の段階でも、仲間内だけにするか外に拡げるかということでは、ちよっと躊躇したんだよ。オープンの部分もあったけど、依然として仲間内の部分のほうが大きかったからさ、それだったら電話でしゃべったっておなじじゃないかと。  
それで、こんどはオープンな部分を強化して、コンピュータのことをなにも知らない人をも積極的にふくめていこうと思ってる……。

津野——それがいまの段階——つまり第三期ね。松岡さんの呼びかけを、このモニターから引用しておこうか。  
「WENNETは87年7月15日をもって、

試運転の第3期に入りました。今期の目標は会議室の数を大幅に整理して、それぞれの性格を明確にすることで、会議室に「電子雑誌」的な性格をもたせることを目標としています。まあ、「電子雑誌」とはいったい何だ？ ということもありませんが、それはそのうちなんとなく形になるのではないかと思います。(巻観)……

室——これもね、やっぱり市川がいいでしたんだよ。この程度であれば、WENETはもっと小さくしたほうがいいと……。

松岡——実際、アクセス数がすごくすくないんだよ。

室——一日に二、三回。

松岡——で、クローズドの部分は最少限にして、あとはできるだけみんなに勝手気儘に使ってもらおうと。そのために、WENETの中に小さなネットをいっばいつくることにした。

室——みなさん、なんでも書いてください、というだけではだめだと。で、

一つのボードというか、一つの小ネットごとにディレクターをつくる。それで粉川さんにも呼びかけて……。

粉川——WENETの中に「東京アンダーグラウンド」というボードをつくらせてもらったのね。

松岡——それで粉川さんのところがこで手狭になってきたら、ほかのところ自分で始めてもらってもいい。それまでの実験をやってもらおうということにしたわけ。

津野——それで、今日までに以下のようなネット内ネットができた。

○お知らせ

○全地球通信 BBS

○北米西海岸通信

○東京アンダーグラウンド

○WENET文書館

○ペントハウス

この最後のやつが、きみらだけのペント・ルームなのね。

室——最初のが、松岡さんと市川さんが書くシステムからのメッセージ。そのほかにも、たとえば津野さんができてきて、「水牛通信」の部屋をつくってくれてもいい。で、こういう人たちにはIDをだしてほしいといえば、ほくらのほうでそうする。その人たちは主として粉川さんや津野のボードに入るんだけど、同時に、ほくらの部屋に入ってきてくれることもできる。そういうかたちを、とりあえず半年やってみよう。

津野——粉川さんのところはもうはじまっているんだね。以下、粉川さんの最初のメッセージ。

「日本で最もフリーなコンピュータ・ネットワークが誕生しました！」

ほかにWENET BBSがあることだから、ここではメディアを意欲したトークやダイアログをひろげていければと考えています。

このセクションに対してはくがいたっているイメージは、誰でも気軽に入って行ってタダで(つまりフリーで)おしゃべりのできるスペースです。

WENETの近くにある自由ラジオ局(ラジオ・ホームラン)も、そんなスペースのひとつだとおもいますが、「東京アンダーグラウンド」は、「ラジオ・ホームラン」のもつフィジカルな空間的・時間的制約を受けないのがひとつの特徴です。「ラジオ・ホームラン」の放送は、facking 郵政省の時代錯誤的規制のため、たかだか一、二キロの サービスエリアしかもてませんが、WENETでは、そのまま地球規模のエリアをわれわれのスペースにできるわけです「うんぬん」。

粉川——まだほかだけなんですよ。IDもだしてないし。最低限、持続的に議論に参加したい、参加できるという人をもとめているところ。

津野——かりにき、今年のすえに「水牛通信」が百一号をだして終わったあと、こんどはパソコン・ネットで作りたいとなったとするよね。そのときはどうすればいいの？

室——津野さんが「水牛通信オンライン」というのをやりたいといってくればいい。いますぐにでもはじめられますよ。

津野——読者というか、そこにくわわって、読んだり書いたりしたい人にIDをだすときは……？

松岡——そういつてくれれば、こっちからだす。

津野——五十人でも？ 百人でも？

室——うん。ただ、パソコンにしろ通信機能つきのワープロにしろ、機械を

もっててくれないとな。

津野——そりゃそうだ。でき、そうやって「水牛通信オンライン」ができたとして、そのなかをまた、いろいろな部屋に分割することもできるの？

松岡——いまはまだできない。

室——つまりき、コンピュータの連中は、いまネットをやっているやつにしてよね、編集という概念がまったくわかってないんだよ。

津野——でも、コンピュータにも編集の概念があるだろ。それが本や雑誌における編集方法を変えていくということだってあるんじゃないの？

室——あるだろうけど、コンピュータ関係者はだれもわかってない。

松岡——はじめから編集の仕事をやってて、それからコンピュータにかかわればわかるんだけど……。

津野——それをきみらがやろうとしているわけだな。

# マイ・ホビー その(3) 高橋茅香子

私のコレクションのひとつに「レイチェル」がある。RACHEL。とくに気にして集めているわけではないけれど、出会うたびにかすかに心にひっかかっては、たまっている。

まずは映画「許されざる者(The Unforgiven)」の女主人公であるレイチェル。テキサスで牧場を営む一家に拾われて育てられたインディアンの娘。奪い返しにきたカイオワ族と一家の闘いの中で長男ベントの愛情を深めていく。

一九六〇年作の西部劇で、おさだまりのインディアンの扱いが悲しいのだけれど、忘れられないシーンが数々ある映画だ。

たとえばインディアンが打ちならす太鼓にこたえて、母親が川岸でピアノを弾く。誰の曲かと聞かれて、背をびんとのばして答える。「ウォルフガ

グ・アマデウス・モーツァルトよ」  
白い馬に乗って疾走するレイチェルが美しい。扮するのはオードリー・ヘップバーン。ほかにベンがバート・ラシカスター、母親がリリアン・ギッシュという顔ぶれで、監督はジョン・ヒューストン。

それからダフネ・デュ・モリア作「My Cousin Rachel」のレイチェル。

ほとんど「レベッカ」だけで有名なデュ・モリアの一九五一年の作品。  
(三笠書房・大久保康雄訳では「愛と死の記録」)

このレイチェルは美しく、神秘的なベールをかぶっている。夫アンブロウズを亡くし、その従弟フィリップの心をとらえ、無実であったのか、有罪であったのか、謎のままこの世からいなくなってしまう。手をふれたものが

ことごとく悲劇になる、そういう女だったのかも知れない。

哀しいのは、コールドウェルの短編「Rachel」で出会ったレイチェルだ。

「ぼくはもう数か月、毎晩、レイチェルと会っている。ぼくが新聞配達をして貰う二十セントで、映画をみるかアイスクリームをたべるか、どちらかにする。十時になるとレイチェルは路地の奥にある家へ帰っていく。でも父親がうるさいからと言って、けっして家までは送らせてくれない。暗い路地の入口で、ふたりは強く抱き合い、おやすみのキスをする。

だからぼくはレイチェルの家も、本当の名前も、家族のことにも知らない。貧しいことは想像できた。毎日同じ、青い木綿の服しか着てこなかったから。でもそれはいつも洗いたてだ

った。ぼくはその服が着古されて、やがて擦り切れてしまうのではないかと心配した。

ある日、出かける間際になって母から用事をいつかつた。外の塵箱にねずみがいって困るから、粉をまくようにと箱を渡された。急いでいたぼくはそれをごみのうえにいい加減にまいて、レイチェルに会いに大通りを走っていった。

レイチェルはすこし遅れてやってきた。映画に行くことになって歩きだすとレイチェルが水をのみたい、と言う。我慢ができないほどのどが乾いているの、というのでドラッグ・ストアにはいった。水をはやく、というレイチェルが真向かいの大きな鏡の中で輝くように美しいのに、ぼくは茫然とした。レイチェルは店員がさしだすコップを奪いとるように水をのみ、もっと水を叫んだ。その目は吊りあがり、店員

が駆け寄った。「遅かった」「遅いってなにが?」「毒をのんでいる」

ぼくは泣きながら、さびしい道を歩いて帰った。ぼくの家の塵箱にかがみこんでいるレイチェルの姿が、あの大きな鏡にうつっているかのように、はっきり見えた。胸が痛かった。レイチェルの美しさがぼくの胸の中で燃えているようだった。

ロバート・パーカーの「Looking for Rachel Wallace」に出てくる女性解放運動家もいるけれど、作られたレイチェルではなく、実際のレイチェルもいい。

「On City Streets」という小さな詩集がある。白黒の写真とカール・サンドバーグやラングストン・ヒュース、グウェンドリン・ブルックスなどの詩が都会をうたっていて、ときどき手にとりたくなる。レイ

チュール・フィールドの詩を知ったのもこの詩集でだった。うまく訳せないけれども、好きなのは彼女の(マンハッタン・ララバイ)。

暗闇の中を明かりのともった窓は

のぼる、高く高く

街路は茫と浮かぶ、雪の中に

タクシーが這う、のろのろと

琥珀色の目をしたかぶと虫のよう

綱の洞窟に車の咆哮がひびく

鋭い響きはサイレン

そして

ひとびとは踊る、死ぬ、結婚する

そして

お前のような子供が生まれてくる

この詩にひかれるのは副題のせいかも知れない——(生まれて一日のリチャードへ)。

いない場所が多いとか。海を埋め立てて造られた土地の上に住む私としてはこの本を読んだり写真を見て、子供のころの感触を思い出したりする。

たとえば多摩川で泳いだこと。寒さにぶるぶる震えながら岸にあがっていると河原の石はやけに熱くて、そのひとつにおなかを当てて腹はいになり、あたたまる。太陽に背中や手足をじりじり照らされて起き上がると、おなかの下にあった石が濡れていて、それが見るまに周りの方からすーっと乾いていく。

この本の最後は次のように書かれているけれど、レイチュール・カーソンはもっと続けるつもりでいたという。

「先日受け取った一通の手紙は、知りたいという気持ちは一を持ち続けられることを雄弁に語ってくれるものだった。一読者からの手紙で、休暇を過ごすための海岸をどこか選んでほしい

最後にレイチュール・カーソン。アメリカの海洋生物学者であの「沈黙の春」の著者。この本を私は違った訳のタイトルで初めて読んだ覚えがある。たしか「鳥はふたたび鳴かない」といったような書名だった。

一九六四年に五十六歳で亡くなっている。一九〇七年生まれなので、今年が生誕八十周年ということ日本で大がかりな記念シンポジウムなどが開かれていたらしい。

でも私がレイチュール・カーソンにひかれているのは別のある一冊の本のため。「The Sense of Wonder」という本だ。彼女が死ぬまで書きつづけていたこの本は、地球や海や空に満ちている自然の神秘に触れることの素晴らしさを語っている。書き出しはこうなっている。

「雨と風がいりまじるある秋の夜、私は一歳八か月になる甥のロジャーを

という頼みだった。文明に毒されていない海岸を散策したり、古くてしかもたえず新しい世界を探究したりして幾日かを過ごしたいという。

残念ながら北部の荒々しい海岸は避けたいとのこと。以前はどこにもまして気に入っていたのだけれども、メイン州の海岸の岩をよじ登るのは無理ではないかと思うから、と彼女は書いていた。もうすぐ八十九歳の誕生日を迎えるので。

その手紙を読み終えたとき、私はほのぼのとした思いに包まれていた。「レイチュールという名前にこだわる理由はまったくない。なんとなく、とか言いようがない。とくに好きというわけでもない。」

でも娘の名前を私の父がつけてくれたとき、それはフランスの画家のミレーからとって美礼にしようということになったのだけれど、私は「お、こ

毛布にくるみ、ぬれそぼる闇の中を浜辺へとおりていった。そこでは、定かには見きわめられない波打ち際にほのかに白い大きな波が響きをたてて打ち寄せ、鳴り響き、叫び、こまかな泡をいっばい私たちの方へと押しやってきた。私たち二人は、心の底からこみあげてくる喜びに、声をたてて笑った——子供は生まれて初めて海の精の荒々しい激昂に出会って、私は人生の半分以上愛しつづけてきた海の塩味を感じて。けれども私たち二人は同じように背中がぞくぞくとするような思いをしていたに違いない。広大な海はうなり声をあげ、私たちを荒々しい夜がとりまいていた。」

主としてメイン州で撮影された写真の数々に自然への郷愁をさそい込まれる。メイン州はレイチュール・カーソン自身が夏に住んでいたところでもあって、今もまったく人の手が加えられて

にもレイがはいる」などと思ってしまう。

コレクションというのは集めている本人以外にとってはくだらない場合がほとんどだから、言い訳しなくてもいいようなものだけれど。



# 任意の一日 山川枯草木

選挙の日。折りたたみの椅子とサンドイッチ、マホービン、インスタント・コーヒーのビン、ミルクを入れたビン、ホーローのコップ、傘、りんご、バナナ、寺山修司の歌集、びらを持って、バーンリ投票所会場、リッチモンド高校の入口につく。ヤラ川のほとり。まだうすぐらい。午前八時ちょっとまえ。あいていない。風雲が急を告げている。とても寒い。外套をき、えりまきをまきつけてきたのは正しかった。外套を着れば失う何かあり豆煮る灯な

はり、そんな、読めるものではない。仕方なくコーヒーをいれる。向う岸のユーカリの何本かが目につき、あいさつをおくる。明るくなってきたから幹の色も明るい。まだ風である。大きな雲が流れているが、西の空にはつねに青い層があり、長く雨が降ることはない。自由党の人からびらをみせてといわれ、一枚わたす。かれらのをみると、アランの順位は？。

やがて、われわれの地区世話人ケイティがまわってくる。コーヒー、サンドイッチはどうかときかれるが、もってきたので。九時すぎ、ウィッキー。今日は五時までびらを配る。初対面。シェバードを連れてくる。名前はヘア妊娠している由。カルシウムをちゃんとしてるかとか、重いものを持たせないようにしているか、出産には立ち合うのかをきく。ビデオでとりたいたのだそうである。選挙運動は学生自治

どに照らされてゆくのである。

やがて、もう一人、おなかの出具合の赤らみ具合からすると労働党だろう。遠くから、"Cody!"と声をかけてくる。イエースと返す。こういうのはじめてだが、"How do you do?"を "Hello"とやって親しみを出すことがあるし、カーディガンをカーディ、ビスケットをビッキーというのは幼児語だし、と二分位考えて、対立候補支持者同士の敵対はないものとする。それから自由党、サーブに乗ってきた。若づくりの女性。娘と息子をつれている。もちろん私立。

八時からの投票にくる人をまちうける。国会下院メルボルン・ポート区の各候補に優先順位をつけたビラを配るのである。びらには、無所属アラン・ブラウンが1と書いてある。2は民主党訪ソ帰り反核候補、3が労働党現職原住民間題相、4が自由党候補。アラ

ン・ブラウンを支持する人には、そのような優先順位で投票してもらおうように。勿論、どう順番をつけようと当人の勝手である。各党のびらはその候補を1としている。小選挙区制、各選挙区の定員は一名。

本日の第一番は男の人、これから仕事にでかけるらしい。かばんをもって、各党から一枚ずつびらをもらった。アラン・ブラウン、みんなの候補、といって手渡す。アランはクーリー(オーストラリア南東部の原住民はじぶんたちのことをさういう)で、労働党原住民間題相のやり方に反対して立ったのだけれど、それは弱い立場にある人みんなのためというわけで、そういうのである。

投票者はたまにしかこない。イスをひるげ、しかし坐らずに歌集を開いてみる。六時までたっぷり時間があるから、はじめから読もうかと思うが、や

会の時したことがある。そう、74年だった。東京か、いつてみたいわね。

民主党の人が足りないらしく、候補その人がきて、ポスターをはり、びらをたばねておいていった。女心理学者。十時(なんだろう)、自由党の交代。おばさん二人。シェバードをほめ、ひとしきり大のはなし。一人は「前の時は労働党に入れたけど、まあ今じゃ労働党も自由党も同様なしょうなもんね」と、しかし組合に文句をつける。看護婦さんなんだそうである。二人はしゃべりつづけ、ウィッキーはこちらに目くばせしてほほえみかける。

やがて、アランのバス。原住民の旗の色、黒と黄と赤をあしらった選挙用横断幕をつけている。アランと、そのアイスクリームをもった二人の子ども。参謀ビル、名前を知らないクーリー二人。一人はあのイスに腰かけ、足を組み、タバコに火をつける。子どもたちはベ

アに吠えられ、川の方へ遊びに行ってしまう。アランは大声で呼びもどし、はげまし合って、つぎの投票場へ。またケイティがきて、別のところで手が足りないというのでさせてもらうことにする。

そこは大通りの教会で、入口のすぐソバに立ってびら配りをはじめると、たった一人の民主党が、「あんたたちは四人だけど、ここはぼく一人だからそこに立たれると困るんだなあ、配りきれない」という。「それは気がつきませんが」二杯目のコーヒーを飲みながら、チーズ、ピーナツバターとほしぶどうのサンドイッチ。りんご一つテリーにあげる。アメリカの黒人女性らしいけど、アランの応援にきている。こちらにも、二週間前に、手伝いましょうか、といったら、じゃあたのむ、という具合。そこに知っている人はだれもいなかった。

またケイティがきて、もう一つのところが手うすだというので、そこへ。大島渚氏によれば、こういうのは「芸者と同じ」なんだそうだ。ほんとそうなんだ。お座敷がかかれれば行くのである。こんなとき、メガネドラッグのコーマーシャルソングなんか思い出してしまふのは悲しいけれど、それでもおしまいで唄う。日本で仕入れた最新の唄なものだから。

今度の投票場は丘の上のカトリック教会で、風が冷たい。冬至がすぎて日脚はのびているのに、もう日がかたむいている。地声でびらを渡したが、そろそろのども疲れているらしい。労働党の若いびら配りと目があうと、アラン・ブラウンが勝つとおもしろいね、という。トイレが近くにあるので、よるしい。ここでは、おしっこが近いというのを、日本人の袋（ポーチ）だね、というのであるが。

五時に丘からおりて川のほとりにもどると、もうくらしい。イスの礼をいってヴィッキーは帰る。おしまいの一時間はよく人がくる。タクシーでかけつける。罰金をとられないように。

六時ちかく、キャシー。これも初対面。二人がアランの開票立合人である。各候補は開票者一人につき一人の立合人を出せる。アメリカ人かと思ったら、旅のスエーデン人。「無起用で冷たくない。英語を話すのが楽しいですよ。ジャーナリストになるコースを大学でとっているという。ほう。放送局につとめたいという。そうですか。ところでエケレーブはもう死んでたかしら。知らないかな、詩人でしよう、エケレーブかな。ああ、エーケレーブ（あたたくくてくらしいしめった者）。ええ、どうして知ってるの。知ってますわさ。日本語で読んだもん。しかし、内容はおぼえていない。ほらを吹いたのと同

じになってしまふ。

六時ちょっと前に投票場に入り、腰をおろしてため息。湯沸場にお茶とコーヒーがあるといわれて、コーヒーとお茶を飲む。投票場の扉が開められ、簡単な説明。ダンボールの箱（新しい）を封じている白いプラスチックのひもが缺けられ、開票が始まる。開票者の四人のおばさんたち。労働党票の山にのせられた自由党票を、立合人の一人（もちろん自由党の）がみつけ、注意した。労働党302。自由党121。アラン39。民主党39。無効48。

茶わんを洗って外へ出る。キャシーはアランのパーティへ。こちらは市電で労働党支持の友人宅のTV開票速報パーティへ。イスをもってマホーピンをぶらさげる。もうすっかりくらしい。夜のユーカーリの匂い。そばに川がながれているはずだ。じゃあまた。

(七月 メルボルン)

# ぬきがきうた (その三)

## 木島始



ことばが闇にふれるとき

どんな顔をするのだろうか

にっこりひどく恐がりつつ

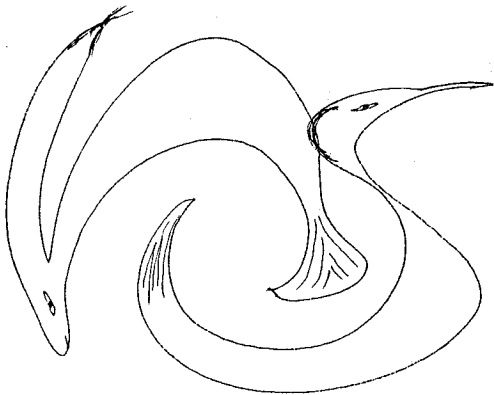
虚空に飛びこむのだろうか

まじみのまみしなめにしみる  
まかなのせなかまかないでと  
かいうちひっしなかなかなせみに  
ちよいとほりちよちよちよしくるよ

しがない試験などまっぱり消える  
なきさから波はあきない青さだ  
とおい友だちカラスのからまわり  
娘にはむりやり泳ぎを教えよう

いびきひびきわたらせ  
ねじりおのろおこには  
らじのまだかじのひっこめ  
むりしないよかたつむりは

みるからに色艶のいい言葉さがせたら  
きつと生きがよくて味もすてきだろくな  
すばらしい肌をわりで向っていられたら  
響きが光るたびに舌なめずりしちまう



# 実現され なかつた シベリア旅行 高頭祥八

「ぼくのシベリアのおじさん」長谷川四郎さんが四月一九日に亡くなった。

長谷川さんはもう六年前から病院で寝たきりだったし、その後ぼくはいなかへ移り住むことになって、しょっちゅうお会いするわけにはいかななくなつたが、東京へ出たときは、できるだけ病院へお見舞いに行くことにしていた。しかし長谷川さんの病状は予期していたより悪化が急で、病院を出るときはいつも、あの頑丈だった長谷川さんが

と、暗たんとした気持ちになったものだった。

俳優座の繪よしえさんの経営する神田の繪画廊で、長谷川さんと開いた「二人による三人展」やブレヒトの「子供の十字軍」の出版をはじめとして、長谷川さんのことなら、ぼくの頭の中には思い出がいっぱい詰まっている。その中のひとつに、実現しなかつたシベリア旅行の思い出がある。

あるとき上北沢の長谷川さんの家ではくは一冊の本を見せられた。それはなんとかいうアメリカ人が帝政時代の末期に考えた、アムール川にミシシッピのようなショーボートを浮かべてひと儲けしようという、一大観光プロジェクトの顛末を書いた本だった。

その本のことから話はシベリアの大地の上を広がって、アムール川から長谷川さんがシベリア抑留時代に、森林伐採の役を流したインゴダ川へ、そし

てアムールの街ハバロフスクと、そこで出会った詩人スモリヤコフのこと。戦前、日本を愛しながら日本から追放された、盲目の詩人でエスペランティストだったエロシェンコと、彼の書いた北極海へ流れるコリマ川のこと。「コリイマの女たち」という詩を書いたヤクートの詩人で、バクーとペイルトのAA作家会議で会ったダニーロフのこと。そして彼の住むヤクートの街と、そこを流れるレナ川のことまで話は広がっていった。

しばらくして、長谷川さんはひざを打っていった。「ダニーロフに手紙を書こう。彼はヤクーツク作家同盟の議長をしているはずだから、彼から招待状を出させてヤクーツクへ行こう。君も一緒に行かんかね。」これが実現すれば、ぼくにとってもしばらく振りのシベリア旅行、ノーであらうはずがない。さらに長谷川さんいわく、「山崎

昌夫にも話してみよう。彼は旅の作家だし社会党だから、こういうときには役に立つはずだ。」

それから数日後、長谷川さんとぼくは新宿のコーヒー店で山崎昌夫と会った。しばらく振りで会った山崎昌夫はずいぶん頭が白くなっていった。彼は即座に提案を受け入れた。

歯車の回転は早くなった。長谷川さんはダニーロフ宛の手紙を書き、それを島崎扶美子さんがロシア語に翻訳してくれた。彼女はアドバイスとともにタイプされた手紙を渡してくれた。長谷川さんはそれにロシア文字でサインして、手紙は投函された。

その手紙にはこう書かれていた。

ヤクーツク作家同盟

詩人 ダニーロフ セミョー

ン ペトロヴィッチ宛

一九七七年一月二九日 東京

敬愛するセミョーン ペトロヴィッチ!

その後いかがですか。お元気のことと思います。私は一九六六年バクーのアジア・アフリカ作家会議、また一九六七年ベルートにおけるアジア・アフリカ作家会議であなたにお目にかかった日本の詩人長谷川四郎です。あなたから詩集「北はおれのもの」と「鉄砲をもったウサギ」をもらいありがたく思っています。あなたの詩をととても良いと思えました。

バクーから日本へ帰りましたから私は「シベリアの旅」という本を出して、中でヤクーティヤについても少し書きました。またアンソロジーを出しまして、あなたの作品「チャチャアニ」と「コリイマの女たち」を訳してそのアンソロジーに入れま

した。

私がかねてヤクーティヤという国にとっても興味を抱いております。ヤクーティヤは多くの異なった民族が独特の文化、風俗習慣を残して生活している、非常に面白い国という印象をもっております。それで今回、私と同様ヤクーティヤに深い関心を寄せている友人二人と三人とヤクーティヤを訪れまして、いろいろ見学いたしたいと思っております。とくにヤクーツクではMogoun Bootourを勉強したいと思えます。

友人の一人は高頭祥八と申しまして、一九六五年バイカル湖での日ソ青年友好祭に、文化代表団の団長として訪れた画家です。彼はその後ベロルシア、ウクライナに行き、一九六七年にもカザン、カフカーズ、アゼルバイジャンを訪れております。そしてそれぞれの印象を、日本の知

職層にとつて代表的な週刊誌である朝日ジャーナルに書き、また東京でシベリアを描いた絵の展覧会を開きました。

またもう一人の友人は山崎昌夫と申しまして、日本社会党機関紙局に勤務していますが文学者であり旅の本を出してあります。

つきましては、旅行に必要な費用は私たちが負担いたしますが、ヤクーツクに六月か七月の二〜三週間を滞在するための便宜を計っていただけないでしょうか。具体的には招待状をお送り願えればと思います。私たちが聞くところでは、ソビエトへの旅行にはまず招待状が必要不可欠ということですのでお願いいたします。あなたのお力添えで私たちの希望が実現できれば、こんなに嬉しいことはありません。まずはお返事をお待ちしております。

ペリアや極東シベリアで出された文芸誌と、何人かのシベリアの詩人たちの詩集、それに一九七〇年から七三年までの、AA作家会議の「ロータス」などだった。

いまこれらの本を見てみると、それはそれぞれドイツ語、スペイン語、ロシア語、英語で書かれていて、これらの中から詩や散文を訳した長谷川さんの語学力には敬服のほかないが、病院へ行くようになってしばらくしてから、これをぼくに渡したということは、もうこの本たちと付き合うことはないだろうことを、何か知らせたのだろう。

入院生活のはじまるすこし前、ある雑誌に書いた「チタ」という一文の中で長谷川さんは、捕虜という制限つきだったが、五年の生活を過ごしたチタの町は、自分にとって「忘れえぬ町」になってしまった、と書いている。一九六六年、ソビエト作家同盟の招待で

「健康と仕事の成果を祈って。」

長谷川四郎

敬具

しかしヤクーツクからの返事はなかなか来なかった。長谷川さんは「なにそのうち来るさ。もうすこし待って来なかったら、山崎昌夫から社会党に話してもらおう」といつていたが、そのようにしたかどうかは知らない。

やがて手紙に書いた旅行の月六月も過ぎ七月になった。この頃から長谷川さんは、前の年の秋におこなった金芝河の芝居、「金冠のイエス」上演のあとで起こったアクシデントで、足もとがおぼつかなくなって病院へ通うようになってしまい、ぼくたちのシベリア旅行の計画は、招待状の来ないままやむやみになってしまった。考えてみれば、一九七〇年代という

行っシベリア旅行のときも、まっさきに行ってみたかったのはチタだった。そのとき長谷川さんを迎えたのはグラウビンという詩人だったが、最後に長谷川さんは「私はもう一度、チタへ行きたいと思っている。こんどは前触れなしに行きグラウビンをびっくりさせてやろう。」と書いている。そして長い入院生活のすえ長谷川さんは死んだ。こうして旅に出ることのなかった三人の小旅行団は、ぼく一人だけを残してどこかへ旅立ってしまった。

いまぼくはこの原稿をワープロで打っているが、すこし前に津野海太郎がぼくに、「ワープロ、パソコン、ファクシミリなど、この情報化の時代に四郎さんが元氣だったら、きつと面白いことをやっただろう。」といっていた。われわれのまわりに急速に張りめぐらされた情報の時代は、きつと長谷川さんの何かを触発させたことだろうとぼ

のは、ソビエトではソルジュニツィンの追放、サハロフへの弾圧、ロストロビーチ、アクシヨノフ、シニャフスキーなどの出国事件があいついで起き、体制批判派Dissonanceに対する抑圧の時代だった。そしてソビエト文化人に対する、ソビエト政府の抑圧に抗議していたわれわれに、招待状は来るはずもなかったということだろう。

やがて七〇年代も終りに近い一九七九年一月一日、山崎昌夫が滑瀧の病院で死んだという知らせが来た。

長谷川さんは病院へ通うようになってすこし後で、「これは君にあげるから、好きなようにしてくれ」といって、みかん箱三個ぶんぐらいの本をぼくに手渡した。それはベルリンで買った本や、チェコ文学のアンソロジー、キューバ作家同盟で出したカルペンティエールの「時との戦い」をはじめとした何冊かの叢書、「アングラ」など東シ

くも想像する。状況を見て何かをたくらみ、やおら立ち上がって動きはじめるのが長谷川さんだった。

長谷川さんがいなくなつたいま、長谷川さんを触発させたであろうこの状況と、誰がどのように取り組むか、これが問題だ。

ワープロのキーを人差し指でポツリポツリ叩きながら、「これはやっぱり俺の使う機械じゃないよ。」と喋り笑っている長谷川さんの声が聞こえてくるような気がする。

ところで長谷川さんからダニーロフの歳を聞かなかったが、彼はヤクーツクでいまでも元氣でいるのだろうか。もし彼が元氣なら、シベリアがあれば好きだった長谷川四郎が死んだこと、長谷川さんが生涯の最後に計画していたに実現しなかった、シベリア旅行計画の顛末を知らせたいものである。それからチタの詩人グラウビンにも。

# 異土の傍居に ならない人たち 田川律

今月は、律はアメリカへ行き、まちは引越して忙しいので「ふぁっしょん読本」はお休みを戴いて、久しぶりで訪れた「西海岸」の「生活読本」を少々書くことにした。

72年に初めてアメリカへ行ったのがサン・フランシスコだったせいか、ぼくにとっては、そこはアメリカでの「ふるさと」という感じが強い。日本にいても感じる「帰って来た」という感覚が、そこにある。それに、そこには数多くの友だちがいて、すでに知り合ってから十何年もたっていて、ついつい「その後」が気になる。

最後にそこを訪れたのが五年前のこと。その時、あの、多くの若者たちが

かれら自身もキライではなかったから、それはいつそうカンタンな「道」だった。その点では、それよりも、何十年も前に日本政府の「棄民政策」でそこへ移住して行った人たちとは、いささか違っていた。同じなのは、どちらも、もはや日本へは帰ることが出来ないということ。

もちろんかれら全員がそうだったというのではない。しかし、五年前にはそういう人がかなりいて「これからどないなんねやる」と、気掛かりだったのだ。

ゴーンは、そんな中で一番マジメといわれ、ひたすら「てきや」稼業にいらして、それでも日本をたつ時の連れ合いとは早くに別れた。ふたりいた子供は、おたがいで育てていた。そのうち、連れ合いのメイはトルコ系アメリカ人と結婚した。五年前にはゴーンは、ほとんど「アル中」寸前だっ

「骨を埋むるは、あにただ青山のみならんや」と思ってたかどうか、やたら「軽やかに」アメリカへ行った、その若者たちが、ひとつの転機にさしかかっていた。それは、簡単に書いてしまえば、「どうやって生活の糧を得るのか」というテーマで、日本にいる時にとりたてて特殊な技能も持ってなかったかれらの誰もが直面したテーマ。

70年代の始めには、それはいともカンタンに見えた。多分に「情報」に振り回されていたところもあるが、まるで、あの国でかつてあった「ゴールドラッシュ」が再来したかのように、そこへ行ったのだ。「まあ、なんとか生きていけるやろ」と。

そして、たいていの人は「てきや」をやった。かっこよくいえば「ストリート・ベンダー」つまり、青天井の下で手造りの物を売る商売をしたのだ。ゴールドならぬシルバーを加工して、

「骨を埋むるは、あにただ青山のみならんや」と思ってたかどうか、やたら「軽やかに」アメリカへ行った、その若者たちが、ひとつの転機にさしかかっていた。それは、簡単に書いてしまえば、「どうやって生活の糧を得るのか」というテーマで、日本にいる時にとりたてて特殊な技能も持ってなかったかれらの誰もが直面したテーマ。

70年代の始めには、それはいともカンタンに見えた。多分に「情報」に振り回されていたところもあるが、まるで、あの国でかつてあった「ゴールドラッシュ」が再来したかのように、そこへ行ったのだ。「まあ、なんとか生きていけるやろ」と。

そして、たいていの人は「てきや」をやった。かっこよくいえば「ストリート・ベンダー」つまり、青天井の下で手造りの物を売る商売をしたのだ。ゴールドならぬシルバーを加工して、

た。「今でも『てきや』をやってるかな」と、真先に訪れたフィッシャー・マズ・ワーフでは、仲間のひとりが、「今日は休み」だといい、親切に家の電話を教えてくれた。五年前に仲がよかったのは、ぼくも知っていた、そのアメリカ人と結婚したという。

「ハイ！ ゴーシイル？」

「ハイ！ タガワサン、ヒサシブリネ。ゴーシハイマ、メイノトコロニイッテイルヨ。ベビーシッターニ。デンワハ・・・」

「はい、田川さん、今どこ？ 今日駄目だけど、明日はまた売りに出るから来れば」。

八月のサン・フランシスコは朝どんなにくもっていても雨が降るなんてことはない。午後にはきまって靑空が広がる。風は爽やかで、冷たいくらい。帆をおろしたヨットがところ狭しともやうである入江が、フィッシャー・マズ

ズ・ワーフで、ケープル・カーの終点でもあり、シスコきっての観光名所である。しかし、もう随分前から、ぼくにとっては、そこは「馴染みの喫茶店か、スナック」とでもいった「場」である。歩道にずらりと並んだ「大道商人」たちは、訪れるたびに顔触れが変わるけれど、日本のどこかの「祭り」の夜店の「大道商人」たちよりも、身近に感じてしまう。「見知らぬ人々」という気がしないのだ。

「いたいた。」

十何年間、着る物はそれしか持っていない、というスタイル。黒いジーンズにカーキ色のジャンパー。サンダラスにバンダナ。長い髪とほうぼうの髭。小柄なかれは、アメリカで「オレハ、ニホンノサムライダ」と自分にいいきかせてきたみたいだ。そのくせ、かれほど、他人に優しく、面倒見がいい人は日本でもなかなかいないほどだ。

抱き合い、歳月の容赦ない流れを、互いの髪や顔の皺に認めた上で、誰その消息を次々に確かめあって、それからやっと「ほんとに久し振りだね」と、落ち着く。「ゲンが今年大学に入ったんだ」「え、あのゲンが大学？」「そうよ、もう十七だよ」

財布から大事そうに取り出して見せてくれたスナップには、あの頃の面影などはほとんど見られない、ひとりの若者が写っている。初対面の時、ぼくの足の裏の皮膚が象みたいに固くておかしいと何度も触った子供とは、似ても似つかぬ「青春の懊惱」をたたえた若者。そしてもう一枚。今度はこまっしゃくれた双子の女の子の写真。「今五つなんだよ。メイの子だけど、すごく可愛いんだ」。

そのゴースト、今年四十六歳。五年前に会った時には、ほとんど「アル中」になりかけていたのが、今は酒を止め

ているという。周りでみんなが飲んで、平然としている。

その周りのひとりにシェウチョウがいる。かれもまたストリート・ベンダーのひとりだったが、五年前には「デューラー」になる危険なところに行ったのが、今はJFCという名の日本の食品を取り扱う会社に勤めている。そして、近くアメリカ人と結婚するそうだが、ぼくがずっと逗留していたロレンスの部屋へきては、かれとふたりで「おないどし」ということで、意気投合しては「おたがい歳をとった」と妙に感心している。どちらも間もなく四十の大病に乗るのだ。

そういえば、日本人だけでなく、同じストリート・ベンダーのアメリカ人も、やっぱりマジメになっていた。夜な夜な、売り場の近くのバーにたむろして、酒を飲んでおだをあげていたあの頃は、遠い昔になってしまったよう

だ。ぼくが一番変わらないで「アホ」をしているような気になってしまっただの、かれらの変貌ぶりだ。

それは、ある面では嬉しくもあり、ある面では寂しくもある変貌。「墮ちる」ことは悪いことには違いない。いつまでも同じような「アホ」なことをしているのも、これまたどうしようもない。にもかかわらず、それを止めた時になる「マジメサ」とでもいうものが、なにもわざわざアメリカにいてなくてもやれる類のものだとしたら、という気がしたりする。

「あの時代」に、日本を棄てることさえも、論議の余地はあるだろうが、そしてそれは、かれらは日本に帰っても、日本的な社会生活には適応出来ないだろう、と思うのだが、結果的には日本にいるのと変わらない「暮らし」の絆にすっかり縛りつけられていく、ということに寂しさを感じるのか。

それとも、そんな風に他人の生き方に干渉するなんてだいたいそれは出来ないのか。抜けるような青空の下で賑やかに行き交う観光客を見るときもななく見ながら、そんなことを考えていたものだ。

「生き方」について悩むには、もう十分に歳をとっているかもしれない。「四十にして惑わず」という諺はそのことを指しているのだろう。悩まなくなってしまうのは、選択の余地がどんななくなるからかもしれない。あるいは、ひとつの仕事を長い間やっていこううちに、その仕事にまつわるものもろることが、多くなってきた、それを処理するのに忙しくて、今更「生き方」のなんのといっている暇はなくなってしまうのかもしれない。

そういえば、もう十何年も前、藤本和子さんがデイヴィット・グッドマンさんと、ぼくの家のすぐ近くに住んで

いた頃、井の頭線の電車の中で、和子さんが「わたしたちの悩みなんか、しよせんはプチブル的な悩みなのよ。明日、生きるか死ぬかの瀬戸際にたたされたら、こんなことを悩んでられないわよ」と言ったことを、とても鮮やかに思い出す。その時の「こんなこと」が具体的に何を指していたかは、あまり定かではないけれど、なんか今書いていることに共通していたような気がしてならない。

なんも考えないで、起きて、食べて寝る、という暮らしと、ぐちゃぐちゃ考えても結局のところ、なんも出来ないで、起きて、食べて寝て、という暮らしになっていくというのの間に、どれだけの差異があるのだろう。「下手な考え体目に似たり」というではないか。それとも、こんなことをぐちゃぐちゃ書くことこそ「プチブル」の一面のかもしれない。

ジョン岡田の「ノー・ノー・ボーイ」という本を読んで以来、アメリカで生きる日本人というのが、いつも気にかかるのだ。日本へ帰れる日を夢みながら、旅費を作る余裕もない日々を追われ、それはついに夢で終わる人たちの物語。なにも日本へ帰らなくてもいいのだが、故郷というものは、犀屋ならずとも「帰る所にあるまじき」点が多々あるけれど、どこかこの小説に描かれているのは「決してこない聖者の日」の歌を思い出させるし、ほかのどんなことよりも「挫折した夢」の典型のような気がするのだ。

結局、とても感傷的になっているだけのことかもしれない。あとひと月もしたら、忘れてしまうことなのかもしれない。だけど、そう思いながら十年は経った、という気もする。あと十年経っても、そう思っていそうだ。

# 走る・その⑬ デイヴィッド グッドマン

私家版ハシル豆辞典

くちばし・り【口走り】口で走ること。また、その人。「口走りの靴底は減らない」

くちばし・る【口走る】走らないのに、走ることにしてやたらに喋り、ランニング・ウェアに高額の金をかけたりして、いかにも自分がランナーであるかのように見せかける。

ぼくは一日置きに走っている。週に

三、四回。一回に四五分から五〇分かけて、およそ一〇キロを走っている。全然走らない人には、長く、遠く走っているように聞こえるかもしれないが、そんなことはない。中ぐらいといふところだろう。

ぼくよりはるかに長く、遠く、速く走っている人はいくらでもいる。たとえばマラソン(四二・一九五)は距離的にも時間的にも、ぼくには無理だ。ましてや、友人がこのあいだ走ったというダブル・マラソン(文字どおりマラソンの倍の距離)はまったく夢のような話、考えただけで呆然とする。

走りはじめた八一年の時点では、一〇分間走れといわれただけでぼくは腰が抜けそうになった。当時カンザス大学で教えていたが、早朝のジョギング・クラブに参加してみた。週に三回、朝六時にフィールド・ハウスという巨大な体育館に行き、体育学の博士課程

の学生に正しい準備体操や走り方を教えてもらった。

じつにいろいろなランナーがフィールド・ハウスの屋内コースを走っていた。疾風のようにぼくを追い越す二〇の娘、家族ぐるみで走っている親子、心臓発作のリハビリ療法としてゆっくり歩いている老人など、さまざまの人がいた。ぼくはマイ・ペースで走ったが、二〇分以内に三回を走ったとき、飛び上がるほど嬉しかった。

ぼくは適当に走っている。走りすぎて怪我をしたり、あるいは走るのに飽きてしまったりするランナーはたくさんいる。最近パーティーで、右半身がカサブタだらけになっている男に出会った。話を聞いてみると、砂利道を自転車走っているとき突然鳥が舞い降りて頭をつつ突いた。驚いてころんでしまった、といった。

「だが、そもそも自転車に乗って

たのは、走れなくなったからだ」と彼はくちばしげにいった。「毎日休まずに九マイル(一四・四)を走ることにしていたが、膝の関節の中の軟骨をつぶしてしまって、手術を受けたところだ。乗っていた自転車はリハビリ用に女房に買ってもらったやつだった」と彼は隣に座っていた奥さんに苦笑してぼくにいった。

怪我したり、飽きたりして走らなくなった人は大勢いる。一年ほど前に新聞に載った世論調査はその印象を裏づけている。

「アメリカ人のジョギング熱は、一九八四年のジョガー(ジョギングする人)一八%をピークに、八五年一五%、ことしが一三%と減少傾向にあることがわかった。しかも、三十代以下の若いジョガーは、数ではなお最も多いとはいえず、減少が目立つ。

最近の調査だと、ジョガー十三%の

うち、毎日ないしはほとんど毎日走るという人たちは二%で、八四年の同三四%に比べて大幅減。一週間に一回以下という人たちは、八四年の五%から一四%へと増加した。ジョギングの距離は三マイル(一マイルは一・六)以下という人たちが三四%(八四年の調査は同三九%)、二マイル以下という人たちは四〇%(同三三%)で、ジョギング回数、距離ともに減少傾向をみせている。

男性、高学歴、若い人にジョギングは人気があるようで、年齢別では、とくに一八歳から二五歳の若いジョガーが二七%と高い比率。五〇代以上四%と大差をみせている。地域別では東部の人気が高くなっている。「(一九八六年九月十日「読売新聞」)

ぼくは、とにかく走りつづけたいと思ってきた。走る回数、時間、距離を、怪我をしない、飽きもしない程度に決

めてきた。そうすれば、走ったことによる肉体的、精神的効果を長く保つことができのではないかと思ったからだ。

レースに参加しないのも同じような理由による。毎年レースの数が増えているような感じがする。八四も余りのダブル・マラソンから六回ものファン・ラン(楽しく走ろうレース)まで、だれでも参加できるようになっている。だが、ぼくはいままで一度も参加したことがない。あるレース、たとえばマラソンに参加することにして、そのために二、三ヵ月トレーニングをつづければ、ずいぶん効果はあるだろうとは思うが、しかし競争というものはどうも性に合わない。人が決めたルールに従って、人が決めたコースを、人が決めた時間に、人に急がされて走るの、ぼくが走っている目的からすれば、およそ無意味に近い。



編集後記

もちろん水牛のために行ったわけではないけれど、アメリカ合州国イリノイ州シヤンペン市の藤本和子・デイヴィッド・グッドマン家をたずねた記念に、ミシガン湖のほとりで録音機をまわしてみんなでしゃべってみようかということになった。もちろん子どもたちも交えてである。そして、ミシガン湖では……。うちの息子は知り合いになつた男の子とミニチュア・ゴルフなどやりに出かけてしまつて不在。デイヴィッドと和子さんはお客（とはつまりわれわれのこと）の面倒をみるのに疲れたのか、よい天気のせいなのか、ひと泳ぎしたあと、うらうらと昼寝。ヤエルはせっせとわたしの脚を砂にうめてゐる。突然、オシッコ！ とカイが叫

ぶ。両親は寝ている。わたしは脚がうごかない。じゃあ、と矢川澄子さんがカイの手をひいてトイレに連れてゆく。悠治はみんなのいる砂浜からずっと離れた芝生でひっくりかえって本を読んでいるらしい。だあれも録音機のことはおもいださなかつた。

東京に帰ってみると、先月はワープロがこわれて難儀をした津野さん、今月は自分の足が故障して、また難儀をしていたのでした。

で、今月号はちょうど一カ月遅れてしまったことになりまして、9、10月号は合併号にして、来月発行します。

シヤンペン支部責任編集のページもあり、増ページ確定です。

室内オペラ「可不可」のチケットは9月15日に発売開始です。12月の一夜を水牛とともにすごしましょう！ 申し込みはアート・フロント・プロデューサー 03・461・3172。(八巻)

\*本誌は次の書店にあります。

- 横峯舎 (新宿) 0352・3557
- 信愛書店 (西荻窪) 0333・4961
- ワンラブブックス (下北沢) 0411・8302
- アール・ヴィヴァン (西武池袋店12F)
- カンカンポア (西武渋谷店B館B1F)
- ストアデイズ (六本木ウエイブ4F)
- 名古屋ウニタ書店 0731・1380

水牛通信 第九巻第八号 一九八七年  
 八月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田  
 正彦 発行所 水牛編集委員会 〒154  
 東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方  
 電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座  
 東京四一九一七九二 印刷所 柳トライ  
 プリントショップ